

尚人が夏美の背後に廻るとブラウスのボタンを一つずつ外し始める。スリッパはじっとりと濡れた肌に張り付き、豊かな乳房の形を浮き彫りにしている。その頂点には小豆色の乳首が硬く尖り布地を突き上げている。母親を下着だけにすると、尚人の手は、果実の皮を剥く様にナイロンを剥がしてゆく。肌はきめ細かく、透き通る様な白さで、とても四十代の物とは思えない。うっすらと静脈の浮いた二つの丘が呼吸に合わせてゆっくりと上下する。

なおもスリッパが下げられると涼子の口からヒュッと短い悲鳴が漏れた。夏美はガードルを穿いていた。その股間が異様に膨らんでいるのだ。

「な…夏美さん、それ…」

「ふふ…これが気になるかい、先生」

尚人は背後からその膨らみを撫でる。やがて刺繍に飾られた布を剥き下ろした。

「ひ…」

太い男根がショーツに透けて見えた。ヒクヒクと動く凶器が、濡れそぼったナイロンの前面を高く突き上げている。

「…い…いやよ、そんな物、いや…」

恐ろしさに歯がカチカチと鳴る。

夏美の口がワナワナと震えた。

「せ…先生…ご覧になって…夏美のおチンチン…」

尚人に強要された言葉を口にすると恥ずかしさのあまり顔を覆う。

「見せてあげるよ」

尚人が下着を剥き下ろした。

ショーツから解放された物がビンと跳ねる。本物と見まごう程に生々しい肉色の男根が鎌首をもたげている。